



くみょうえん  
**正休寺 命苑**  
永代供養墓

**永代供養墓の意味**

近年、家族制度の変化や少子化の進行等によって、先祖代々のお墓を継承していくことが困難な時代となってきました。「長男は東京で就職してこちらに帰ってこない娘ばかりで、自分たちが死んだら誰が墓を守ってくれるのか」など、このような不安や悩みを解消する手立てとして、継承者に代わりお寺の責任において永代に管理、供養させていただくのが「正休寺永代供養墓「共命苑」」です。

**宗旨宗派を問わず**

近年、長男長女の結婚が増え、両方のお墓を維持するというケースが増えています。当然宗旨もお寺も違う場合がほとんどであります。「自分たちの代はできるが子供の代になったらどうなるかわからない。」という不安を抱えておられる方も多くいらっしゃいます。このような様々なケースに対応して、個別にご相談のうえ納骨させていただきました。

**永代供養墓お扱いについて**  
(生前申請できます)

**特別安置型納骨** 五十万円

大型墓碑と石棺の扉にお名前を記載し、三十三回忌まで個別に特別石棺に安置。以後合葬永代供養とする。

**一般安置型納骨** 二十万円

大型墓碑にお名前を記載し、三十三回忌まで個別に安置。以後合葬永代供養とする。

**合葬型納骨** 十万円

墓碑にお名前を記載し、合葬永代供養とする。

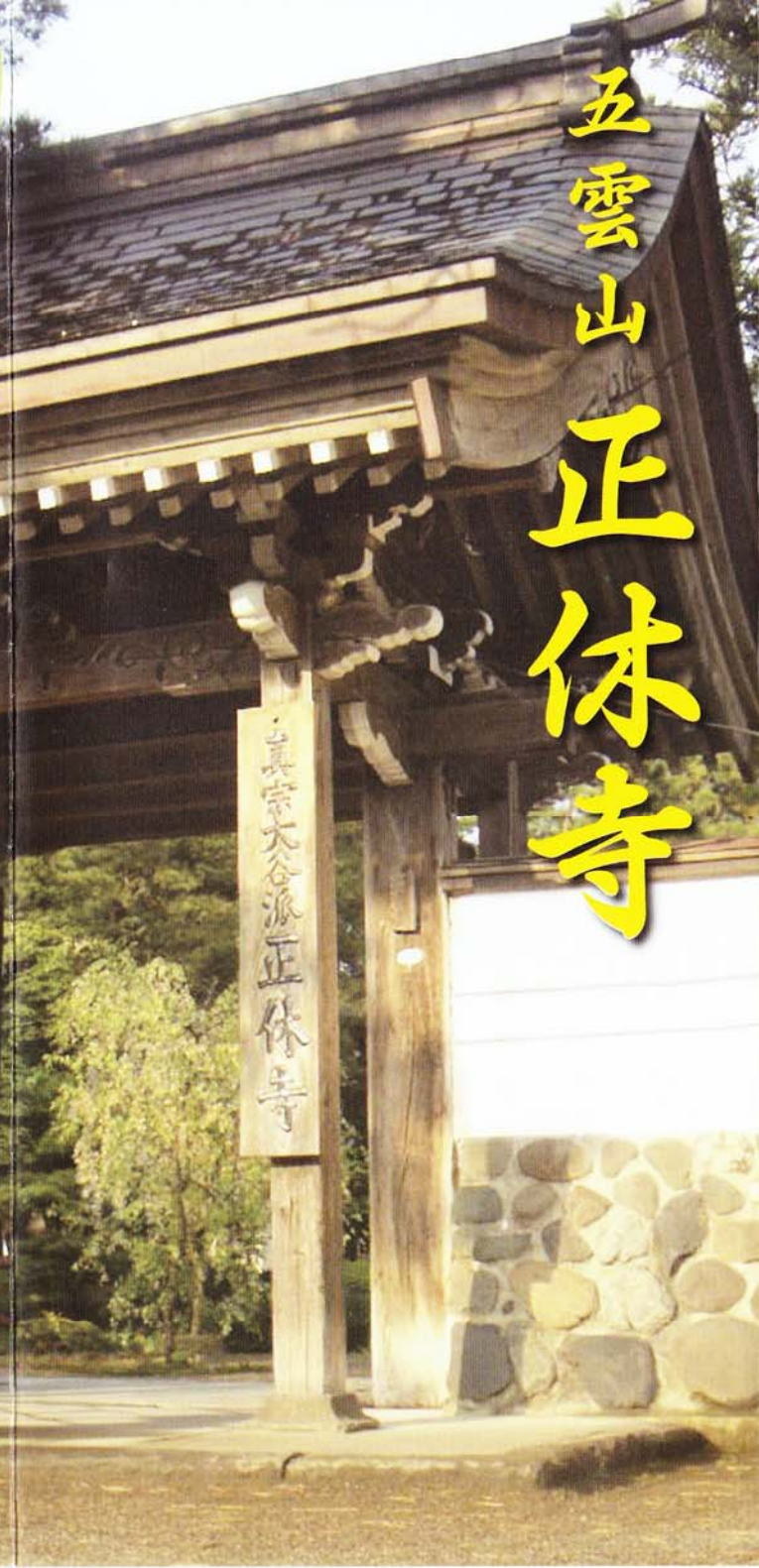
**分骨型納骨** 五万円

墓碑にお名前を記載し、骨壺に安置する。

**墓地改装に伴う納骨** 十五万円

墓碑に家名を記載し、合葬永代供養とする。

**五雲山 正休寺**



**宗旨 浄土真宗**

(津軽地方では通称「門徒宗」と呼ばれています。他の地域では「一向宗」とも呼ばれる。)

**宗派 真宗大谷派 (本山 京都 東本願寺)**

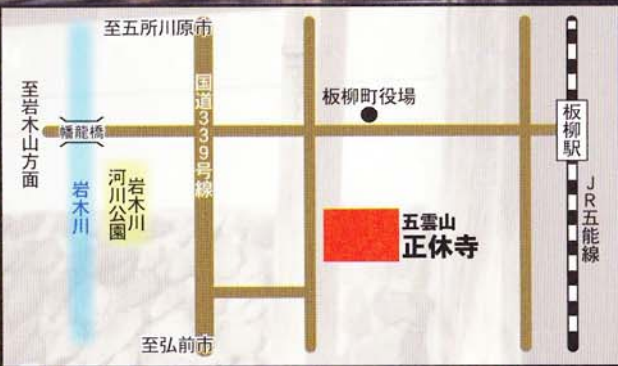
**宗祖 親鸞聖人**

一七三年、京都にお生まれになり、九歳で出家得度。比叡山で二十年間厳しい修行をされた。しかし、修行では自分の満足する悟りが得られないと、二十九歳の時に比叡山を下り、法然上人のもとに行き本願念仏の教えに出会い、肉食妻帯の生活を始める。三十五歳の時、念仏弾圧により流罪に処せられ越後の国に赴く。流罪赦免後には関東の地で積極的に本願念仏の布教に努められた。六十歳を過ぎたころ聖人は京都にお戻りになり、「顕浄土真実教行証文類」(教行真証)を完成され、一二六二年、九十年の生涯を閉じられた。

**正依の經典**

**浄土三部經**

「仏説無量壽經(大經)」 「仏説觀無量壽經(觀經)」 「仏説阿彌陀經(小經)」



**五雲山 正休寺**

〒038-3662  
青森県北津軽郡板柳町大字板柳字土井241  
TEL. 0172-73-2016  
FAX. 0172-73-2042



## 正休寺の縁起

正休寺は浄土真宗の流れを汲み、その住職は家庭生活を営み、親から子供、そして孫へとお寺を継承してきました。

正休寺住職を務める高澤家は、現在二十五代目にあたる高澤暢男が住職を務め、万治二年（一六五九年）現在の地に一字を建立し、正休寺と名乗ってからは十五代目の住職となる。

高澤家は、源氏の流れをくむ豪族で常陸の高澤伊賀守源朝臣氏信（一一八五〜一二七〇年）の二男の高澤次郎源朝臣義氏を初代とする。父氏信は常陸で教化運動をする親鸞聖人に出会い弟子となり、法名念信を賜り照願寺（現在は茨城県那珂郡美和村鷺子）の開基となる。

初代の義氏（一二一八年〜一二六七年）は、父氏信の影響もあつてか、夢のお告げにより二十六歳の時、京都に戻られていた親鸞聖人のもとを訪ねるべく上洛し、五条西洞院において聖人の教化を蒙り、弥陀の本願の謂れを聞法し、随喜のあまり、武勇の髻（もとどり）を切り弟子となり、法名順信を賜わった。しばらくしての後に常陸に戻り一字を建立した。

本家の照願寺は五代目の時、武門を捨て、三万石を分け与え従臣離散とあるが、その時五代目順照



正休寺本尊「阿弥陀如来」

御坊は北陸松任に移り一向一揆に加わる。その後、八代随圓御坊が朝倉との戦いで討死し、その子順圓は母方の北条氏に預けられる。十七歳の時に照願寺に移り、その後一字再興したが、間もなく兵火により焼失する。これを機に家臣門徒と共に念仏流布の為、奥州に赴く。途中南部花輪に草庵を結び、弘治二年（一五五六年）にはお供十数名と共に浪岳（現在の浪岡）の山中に大道寺を建立。しかし、

浪岡城が津軽藩によつて滅ぼされたことから現在の弘前市堀越に移され、さらに弘前市新寺町の真教寺内に移された。その後、板柳

## 五劫思惟如来像

このお木像は、今から四三〇年前前、太閤の重臣浮田大納言一族の家老の杉浦八十右衛門という人が、家臣と共に十二歳の若君を擁して津軽の地（弘前市三世寺）に落ちのびて行くとき先祖を祀るために所持してきたとされる。後に主従は世をはばかって会津姓を名乗り、今から一七〇年前に正休寺十一代堂順上人のとき寺に移されて以来寺宝として大切に安置されている。尊像は、わずか十二寸台座を含めて十六寸の木像で鎌倉時代のものとされる。



の現在地に移ることとなるが、正保四年（一六四七年）時の津軽藩家老が大道寺であったことから、その名を遠慮し正休寺と名乗り現在に至る。

本堂は、明治二十四年に類焼し明治三十九年に再建したが、山門は消失を免れ、現在板柳町最古の木造建築として町の文化財（第二号）に指定されている。

山門は、建築学上の鑑定により寛政年間（一七五一年〜）の建物とされ、当時の宮大工の力量と気概を存分に示す貴重な建物となっている。

